

## 街並みと復興の倫理

—現代の都市において場所性を媒介するもの

京都大学大学院 人間・環境学研究科 准教授 前田昌弘



### 1. 場所性に即した再建

昨年9月の終わり頃、城崎（兵庫県豊岡市城崎町）を訪れた。城崎は、『城の崎にて』（1917年）などの文学作品の舞台にもなった湯治場、温泉の街としてよく知られるが、その街並みの形成に約100年前の災害が深く関わっていることは一般にあまり知られていないかもしれない。1925年5月23日午前11時9分に発生した北但馬地震の揺れによる建物の倒壊とその後の火災により、城崎（当時は兵庫県城崎郡城崎町）の街は一晩で焼け野原となった。

城崎出身で地元文化財・街並み保全にたずさわると松井敬代さん（豊岡まち塾・副塾長、豊岡まちなみ連盟・会長）のお話を聞きながら街を歩いた。木造の建物と細い街路がつづく現在のヒューマンスケールな街並みは一見するとずっと前からそこにあったかのように見える。しかし、実際にはそれらのほとんどは以前の街並みを再現しつつ、震災後に再建されたものである。すなわち、土地の1割無償提供による区画整理、街の中央を流れる大谿川の改修と地元産の玄武岩を用いた護岸整備、公共施設・角地建物の不燃化（RC造による再建）など、街並みに配慮しつつ避難路確保や延焼防止のためのハード面のアップデートが行われたのであった（図1）。それらは、城崎の街の変遷を熟知する松井さんの解説がなければ見逃してしまいそうなほど、現在の街並みに溶け込んでいた<sup>(1)</sup>。

少し考えてみると、これは驚くべきことである。北但馬地震発生当時の日本は、近代化・西洋化に邁進していた時代であり、かつ地震の約2年前に起きた関東大震災では西洋近代の不燃化・耐震化技術を取り入れた壮大な帝都復興計画も示されていた。城崎でも当時



図1 現在の城崎：街の骨格を成す大谿川沿いの街並み

の最先端技術によって街を大刷新することもあり得ただろう。しかし、そうはならなかった。もちろん、街を大刷新するにしても様々な制約があったことは想像に難くない。しかし、そのことを差し引いて考えたとしても、地震と火災によって壊滅的な被害を受けたにもかかわらず、また、近代化・西洋化という時代の潮流に逆行しながら、城崎の人びとが温泉街の風情を守るべく木造を基調とした街並みの再建を選択したという事実は、やはり驚くべきことである。

城崎を訪れて感じたのが、本号の特集テーマでもある復興の「倫理」、つまり復興に際しての「ものの感じ方、考え方」の現代との違いであり、それが反映された再建計画がもつ力強さであった。それは一言で表せば、「場所性に即した再建」ということになるだろうか。都市開発にしても復興・防災にしても、近代以降の技術は「没場所性」を特徴としており、人びとに場所性を失わせることで普及してきた。そして、近代とは、そのようにして都市や環境を人びとの手で作るかえりかえることを称賛する時代でもあった。だからこそ、

都市の近代化の波が本格的に押し寄せてきていた時代の只中にありながら、城崎の街が「場所性に即した再建」を成し遂げたことは、少なくとも私の眼にはとても新鮮なこととして映った。一方で、現代の都市では、没場所化が私たちの暮らしに浸透しきっており、私たちにとって「場所性」は実感しづらいものになっている。だからこそ、復興を「倫理」（＝ものの感じ方、捉え方）のレベルから考える必要がある。

## 2. 復興に内在する没場所性

### 場所性と復興

場所性とはなんだろうか。地理学者エドワード・レルフは『場所の現象学』<sup>3)</sup>で、「場所」とは人が直接かかわることで意味づけられ、周囲から分節された空間であると述べた。人間が生きているということは、身の回りの空間や環境に自分なりの様々な意味を与え続けることと同義である、とも。そうして場所に「根をおろす」ことは人間にとって基本的な欲求であり、その人の「根っこ」は、その場所について知ることによってつくられ、また、その場所によって知られるという。

それに対して、「没場所性」とは、本来多様だったはずの場所の意味への無意識的・意識的な無関心である。それは表面的なイメージだけが商品化された郊外住宅地や観光地等の無意識の「キッチュ性」、あるいは都市計画等における意識的な技術偏重の態度である「テクニーク」に典型的に見いだされる。レルフは1950～60年代のアメリカで大衆社会の成立とともに人の直接経験や人間的規模からかけ離れた大量消費、大規模開発が「没場所性」を助長している状況を嘆き、現象学的な側面から場所に関する理解を試みた。

「復興」も、レルフがいう「没場所性」が現れる典型的な状況の一つであろう。ここで言う「復興」とは、「未来は過去よりももっと便利で快適に」を信じて進む近代主義に同調しながら生み出された概念装置であり、土木、建築、都市計画はその装置を駆動させる重要なパーツであった。近代は、技術・制度の標準化、空間の均質化を特徴とし、復興もまた、特定の場所と

そこに集積された個別の経験を捨象することで技術・制度を普遍的に適用してきた。その意味で復興は「没場所的」である。だが、一方で、没場所的だからこそ、人は困難に直面してもなお前を向けるという見方もできる。と言うのも、場所は、そこに「根付いている」、「参加している」という肯定的な感覚を与える一方で、そこに「縛られている」という否定的な感覚も時に与え、重荷ともなり得るからである。

場所と没場所性は、表裏一体の関係にあり、前者が人間の直接経験に根ざした帰属感、安心感を与え、後者は特定の場所の文脈に囚われない広いものの見方を与えてくれる。近代に生じた様々な運動には「場所からの解放」という性質が少なからずあった。復興も、場所性を失わせる性質をもっているからこそ、人は被災にまつわる重い経験や複雑な感情をひとまずは脇において前に進むことができるのかもしれない。それが結果的に、個人の力では成し得ない近代的都市基盤の整備や、災害に強い社会の形成に寄与してきたという側面はたしかにあるだろう。

### 没場所化の弊害

ところが、行き過ぎた没場所性は、本来多様である人びとと環境の関わりを一義的なものへと貶め、没場所化した空間は社会に様々な弊害をもたらしてきた。アメリカの大都市でそれはすぐに社会的孤立の問題として表れた。没場所化への対抗策は、「場所の復権」である。人びとが他者や社会と関わるうえで場所が果たす決定的な役割を認め、都市に居場所を再生する動きが広まっている<sup>(2)</sup>。日本で社会的孤立の問題が広く認識されたのは阪神・淡路大震災後の孤独死の増加であった。孤立防止は以後の災害でも主要な課題となり、仮設住宅・復興公営住宅の計画、被災者の見守り、居場所づくりなどの取り組みがつづいている。

また、阪神・淡路大震災、東日本大震災の経験を経て、「防災から減災へ」と言われるようになった。このフレーズは、地域のレジリエンス（回復力）の低下に対する危機感の表れであり、ここにも没場所化が関わっている。すなわち、かつては災害に際して場所ご

との資源を用いて被害の軽減、生活の再建を行い、人々はそうやって環境との距離を保ちながら資源の恩恵を享受していた。災害文化とは、そのような場所への感性が根底にあり、減災の知恵や技術が蓄積されていったものである。減災は、現代の災害対策のようなパッケージ化された「手段」というよりは、その場所にみあった人びとの「生き方」に近いものであった。そうやって時代や場所ごとの限界や制約を受け入れていたことは、様々な文学に描かれた人びとの姿からもうかがい知れ、自然の脅威を前に人の「ままならなさ」を皮肉ったり、時にたのしむ風潮すらあった。

災害のリスクを可視化し、環境を制御する技術が発達した近代以降、限界や制約が少なくなると、減災や災害文化にみられた人びとの自然に対する態度も変化し、場所への感性は後退していった。時代を後戻りできるわけではない。しかし、現代の都市における社会的孤立の問題も地域の回復力の低下も、その根底にあるのは近代以降の没場所化にともなう場所への感性の後退である。そのように考えたとき、場所への感性を回復することが、災害を含む様々な社会問題を回避するための地道だが確かな道筋に思えてくる。

### 場所性を共有する意味

場所は人それぞれの直接的な経験にもとづくものであるため、客観的・定量的な分析に馴染みにくい。ある人にとって場所性は、第三者的に分析・説明されて納得するものというよりも、その場所を受け入れよう、理解しようとしてやってくるものである。そのため、場所性を理解し伝えるのに、人の感覚や体験に働きかける手段、たとえば言葉や文学、音楽、絵画、映像、アート等がしばしば用いられる。

冒頭でふれた城崎の街の再建では、当時の町長・西村佐兵衛氏が地震の後、源泉から温泉が湧き続けていることを自らの目でまず確認し、「この湯が湧き出る限り城崎は大丈夫だ」という言葉とともに温泉を中心とした街の再生を誓い、住民に協力を訴えかけたという。この訴えが、独りよがりの叫びに終わらず人びとの心に響いたのは、それが西村氏というリーダーの直

接経験にもとづくたしかかな言葉だったこと、そして何より、温泉を中心とした街という場所性が人びとに共有され得るものであったからだろう。彼らが守ろうとした街の「風情」や「雰囲気」もまた、人びとの直接経験を通じてつくられてきたものであり、それらは復興の論理の前では儂いものである。当時の城崎の人たちは、町長がいち早く発した言葉に自らの体験、感覚を重ね合わせ、そうすることで、復興の論理に対抗する場所の論理が形づくられていったのだと想像する。

「場所性」を他者と共有することが復興において重要な意味をもつことは、城崎の街の再建から現代の復興や防災が学ぶべきことのひとつである。

### 3. 場所への感性を現場で重ねあわせる

以下に紹介する2つの事例はどちらも、筆者自身に関わってきた、人それぞれがもつ場所への感性に働きかける方法についての、ささやかな試みである。震災から四半世紀が経過した神戸、長らく大きな災害を経験していない京都、そのなかでも大きな被害を免れてきた密集市街地を活動のフィールドとしている。どちらも災害の影響（被災の痕跡や復興の結果、将来の災害の予兆）がみえづらくなっている街であり、そういった街を多様な視点をもった人たちと歩き、まちについて話すことで、それぞれの場所への感性を現場で重ね合わせ、意識化することを試みてきた。

#### 復興ダイアログ

「復興ダイアログ」を、2021年5月から神戸市長田区にある神戸市立ふたば学舎を主な会場として2年間にわたって開催した。阪神・淡路大震災を直接経験していない世代（大学生・高校生世代）と復興を語ることを主な目的として、防災学を専門とする兵庫県立大学減災復興政策研究科・阪本真由美さんの声かけのもと、哲学を専門とする人と防災未来センター・高原耕平さん、ふたば学舎で震災学習を実践してきたNPO 法人ふたば・山住勝利さん、建築学・まちづくりを専門とする筆者、そして公募によって集まった学生サポーターを中心メンバーとしてはじまった。概要

は本特集の別稿に記載の通りであるが、1年目は中心メンバーが設定した4つのテーマごとにゲストを招き、ゲストによる話題提供と参加者による話し合いという形で行い、2年目は避難所で使われていた救援物資、被災地の街並み、避難所での食、被災地を記録した映画・映像に触れながらダイアログを行った。1年目は復興にまつわる言葉や語り、2年目は被災を経験した物や場所に触れることを重視したと言える。

筆者は1年目第5回「復興の内がわと外がわ」、2年目第2回「街並み」を担当し、どちらの回も神戸で地域の防災まちづくり支援に取り組む建築士・松原永季さんをお呼びした。各回ともまず、松原さんから被災地の街並みを観察する際の視点と方法(路上から観察して気になったものを何でも対象とする「路上観察学」の方法)について解説があり、次に参加者はふたば学舎周辺の街並み(復興再開発エリア外の密集市街地)を各自で観察し、スマホ等のカメラで記録した写真を持ち寄った。そして、投票により参加者の関心が高かった順番にその写真について撮影者が解説し、参加者全員で意見や感想を述べあった(図2)。

参加者から報告されたものの多くは、通常は「街並み」とは言わないような風景や場所、建物の些細な要素であった。例えば、建物の側面の外壁に残された以前あった隣家の輪郭、木造の街並みとその向こうに見える復興再開発ビル群、家の前の路地に置かれた物干し台・植木鉢・自転車・漁具・・・、アスファルトや



図2 復興ダイアログ：意見交換の様子(2022年9月25日)

ブロックの舗装、側溝の金属製の蓋がパッチワークのようになった道路の表面、路地奥にある小さな店とフェンスで囲まれた空き地、私道と思われる道路の真ん中に置かれたカラーコーン、などである。持ち寄られた写真には、それを通じて復興に関する何かを伝えたいという意図をもって撮影されたものもあったが、むしろ、復興との関連はわからないが「なぜだか気になった」というものも多かった。いずれにせよ共通していたのは、その人が他の参加者と共有してみたいと思った「街並み」であったという点である。

ダイアログでは、地域の事情に詳しくない参加者が撮影した「街並み」について、その背景や解釈を松原さんや参加者のなかにいた地元の人が述べるという場面があった。たとえば、パッチワーク状の道路表面はこの地区で続く密集市街地整備事業の結果であること、道路に置かれた物は震災後もこの地区に残る公と私が混ざりあった下町的な領域性の表れであること、といった具合である。ダイアログを通じて、参加者は何気ない「街並み」に潜む被災や復興の記憶に触れ、地元の人や松原さんは何が震災を直接経験していない人たちの心に留まるのかを知る。被災や復興に関する知識や経験に差がある人たちが集まったからこそ、このようなやり取りが生まれたのである。

### 防災まちあるき

京都市下京区有隣学区は、市の都市計画上の中心エリアである通称「田の字地区」の南東端に位置する元学区<sup>(3)</sup>である。学区を東西に走る「松原通」は平安京の時代には「五条大路」と呼ばれた大通りであり、遅くとも近世初期までは、この松原通が京都の市街地の南限であったと言われる。町家や路地が多く残る一方で、マンション・ビル・ホテル等の開発が進み、現在は新旧の建物と住民が混在する地域となっている。有隣学区は都市計画上、地震や火災に脆弱な、いわゆる密集市街地に位置づけられている。2016年度からは市の専門家派遣制度を活用した地域防災まちづくり計画策定の取り組みが始まり、学区の自治組織の一つである有隣学区まちづくり委員会が中心となって



取り組みを進めている。まちづくり委員会には毎回、委員である地元の人に加え、行政の担当者、専門家、大学の教員・学生等が出席している。委員会では地元の人も外の人も同じテーブルにつき、「ともに考える」という姿勢で話し合いが行われている。

取り組みのなかで、地域の防災マップをつくることになり、マップに掲載する情報を現地で点検しながら収集する、「防災まちあるき」を行った。防災まちあるきの目的は、地元の人が住み慣れたまちを「防災」という観点から見つめ直すこと、また、委員以外の住民が防災まちづくりの活動に関心を持ち参加するきっかけをつくることであった。防災まちあるきをやってみてわかったのはまず、古い木造家屋や狭い路地など、防災上の課題となりそうな箇所が集中しているエリアが思いのほか多いということであった。木造家屋の分布を現地で確認のうえ地図に1軒ずつ記録し、また、路地の幅員をメジャーで測り、通り抜け・袋路の区別、緊急避難扉の有無、トンネル路地か否か等の点検も行った(図3)。また、建物の構造に詳しい専門家(市の耐震補強担当職員)が同行することで、看板建築<sup>(4)</sup>やトンネル路地<sup>(5)</sup>の屋根・建物といった、やや特殊な建ち方をしている建物の強度についても解説が行われた。こういった「同行者」は専門家であるとは限らない。町内に住む人がまち歩きに同行することで、その町内の空き家や要支援者の所在といった、外観だけでは窺い知れない、防災関連情報を得ること



図3 防災まちあるき：細街路の幅員を測って確認する

ができる。これらは普段、町内の人たちだけで共有されている情報なのだが、町内を歩く日時を事前に伝えておき、防災まちあるきの当日に待機していた住民に現場で情報提供してもらった。このような、防災まちあるきの同行者を広く募るといったやり方は議論の過程で出されたアイデアであり、まちをみる際の視点を増やすうえで有効であった。

防災まちあるきを通じて浮き彫りになったのもまさに、まちをみる視点の豊富さ、また、場所の捉え方の違いであった。たとえば、京都では路地は「ろーじ」と発音され、茶庭を意味する露地(ろじ)と区別される。路地は、不特定多数の人びとが往来する表通りとは異なり、そこに住む人たちの生活の場という性格が強い。防災まちあるきで路地に立ち上がった際、ある年配の参加者が、「この路地、入ったのは久しぶりやなあ。子どもの頃はよくここで遊んでたけど。」とつぶやいていた。路地は本来、そこに住む人以外はむやみに立ち入らない場所であるという感覚が地元の人の間には残っているのだ。路地には近年、住人の高齢化にともない空き家が増え、そこが店舗やゲストハウス等として不特定多数の人に利用されるケースも増えている。変化していく路地の場所性に応じた防災対策も講じる必要があることが確認された<sup>(6)</sup>。

#### 4. 場所への感性を媒介する街並み、同行者、対話の場

場所への感性は本来、人それぞれが内に秘め、他者とあえて共有しないものなのかもしれない。本稿で紹介した2つの実践事例(復興ダイアログ、防災まちあるき)はどちらも、人びとが街を歩き、その体験について話し合うということを含んでいる。それ自体はどこにでもある、ありふれた行為である。しかし、そこに少しの工夫と新たな要素を加えることで、場所への感性の違いが意識化され、その行為はより発見的で有意義な体験となる。そこで最後に、街並みの体験をより豊かにする要素として、「媒介」、「同行者」、「対話の場」を挙げ、本論を締めくくる(図4)。

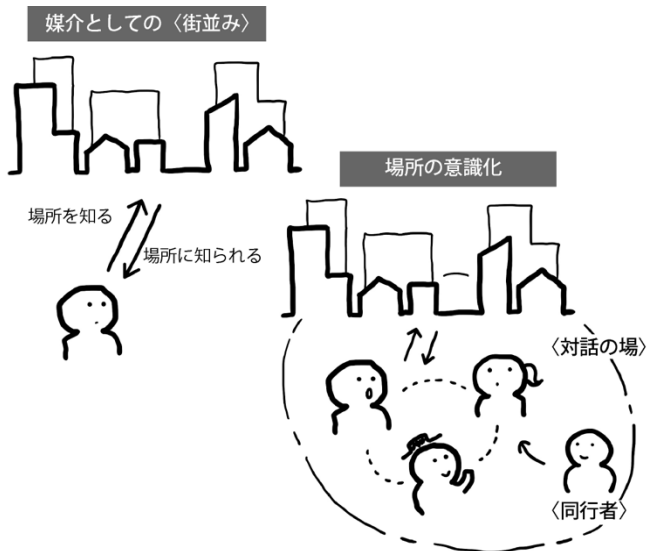


図4 媒介としての街並みと場所の意識化

まず、「媒介」を意識すること。媒介とは、何かを介することで、ある行為が成り立つというモノの作用のことである。たとえば、「立つ」という行為は、地面や床などの水平で安定した面があることで成り立っており、地面や床によって媒介されている。街並みを「みる」という行為も、街並みを構成する様々なモノ、人工物によって媒介されている。そして、街並みを「みる」という体験を他者と共にすることで、街並みを介して他者のものの見方に触れ、自身のものの見方が相対化される。そうして、場所への感性が意識化されていく。私たちの「根っこ」(存在)と場所は深く結びついている。だとすれば、街並みをみるということは、今、この場所にいる私や私たちとは何者か、という問いと深いところで関わっている。街並みを媒介とすることで、私たちはその場所について知ると同時に、街並みによって知られ、そのように「みる」私たちとはどのような人びとであるのかを知るのだ。

このような私たちという存在の捉え方は、モノや空間といった人以外の存在も行為者性 (agency) をもった主体と見なし、社会を人と人以外 (モノ) の主体による混成的なネットワークとして理解しようとする、近年のポストヒューマニズムの社会理論にも通じる<sup>(7)</sup>。たしかに、現代の都市で私たちは、私たちでは

ない誰かの手によって作られた、膨大なモノに囲まれて暮らしている。そうしたアノニマスなモノに埋もれ、没場所化した現代の都市において場所性を見出すことはできるのか。そのような問いを立てたとき、現代人の生活とむしろ不可分な存在であるモノを起点として発想し、「モノもまた主体である」と言って私たちの世界に対するものの見方に転換をもたらそうとするポストヒューマニズムの議論は示唆的である。しかし、では、どのようにしてモノと積極的な関係を築いていけるのかという問いへの答えを、この議論は与えてくれない。そこで最後に、筆者がさしあたり重要であると考えている、媒介としての街並みを意識させてくれる、「同行者」と「対話の場」について述べる。

まず、「同行者」とは、街並みについての「実践感覚」をもった「外部の人」である。「実践感覚」をもった人とは、たとえば、街並みに関する知識や経験をもつ専門家のことであるが、それに限らず、そこに暮らす人もまた生活を通じて蓄積された実践感覚(ハビトゥス)をもっている。彼らに共通するのは、ある場所について安定した感性をもつということである。同行者は「外部の人」でもある。外部の人であるからこそ、内部の人が持ち得ない視点や感覚をもたらしてくれる。ここでいう「外」とは、空間的な外部に限らず、属性を異にする人や活動の非当事者など、何らかの意味で「外」にいるような人のポジショナリティを指す。したがって内と外の境界は絶対的なものではなく、目的や状況によって揺れ動く、相対的なものである。だから、ときには地元の人も同行者となり得る(たとえば、復興ダイアログに参加した地元の人、防災まちあるきで待機していた町内の住民など)。こういった「同行者」は通常、取り組みの中心人物ではないため、せいぜい「支援者」や「関係者」として括られ、その存在は目立たない。しかし、同行者の視点を通じて街並みをみることで、場所について知り、そして場所によって知られるという再帰的な関係が生まれやすくなる。そのような意味で、同行者もまた、場所への感性を共に構成する重要な存在なのである。

さらに、「対話の場」とは、ある場所について、人びとがなるべく対等な関係のもとで話をする場のことである。他者の場所への感性に触れることで、自身の場所への感性に出会う場であるとも言える。場所への感性は人それぞれ異なる。このことは、誰かがみた街並みをその人と同じようにみることはできないということを意味する。そしてまた、特に被災や復興という事象に向き合おうとした時、私たちに重くのしかかってくる。すなわち、被災の経験の有無や災害からの時間経過によって、街並みを他者や過去の自分と同じようにみることができなくなる。そのことによって復興について語るものが難しくなるという場面に、復興ダイアログの中でも幾度か遭遇した。対話の場づくりについて、筆者らの活動のなかでも、ワークショップやダイアログの手法等のノウハウは随分と蓄積されてきた。しかし、倫理（ものの感じ方、捉え方）の次元で改めて捉えてみたとき、この、街並みをみるという行為に横たわる他者との共有不可能性という問題は積み残されたままであった。

このことについて私としてはひとまず、他者と同じようにはみられない、しかし、だからこそ意味があるように考えるようにしている<sup>(8)</sup>。たとえば、復興ダイアログや防災まちあるきに参加したのは半ば偶然その場に集まった人たちであり、一見すると何ら接点をもたない。だが、街並みを他者と同じようにはみられないという、そのただ一点においては皆同じである。だからこそ人びとが対等な関係でいられるような場が成り立ち得るし、逆に言えば、そういった経験や知識の差に関わらず対話ができる場づくりが必要なのである。人びとが対話を通じて他者、そして自分自身の場所への感性に出会い、それぞれの場所へと戻っていく。没場所化の波が常に押し寄せてくる現代にあって、そのような体験を提供し、私たちという存在の根っこを形成する場が、災害に真に強い社会に近づくうえで欠かせないのではないだろうか。

#### 補註

(1) 復興事業の全体像は参考文献1に詳しい。筆者らは兵庫

県立大学大学院の演習（担当・阪本真由美教授）に同行し、後日、松井氏に行ったインタビューをもとに、復興事業後の街の変化についてまとめた（参考文献12）。

- (2) 参考文献4、5など
- (3) 明治初期、日本で最初の学区制小学校である64校の番組小学校の単位となった町組（番組）を起源とする。小学校統廃合後も「元学区」と呼ばれ、地域の自治機能を担っている。京都の地域自治の最小単位である町内が集まってきており、町内ごとの自治会・町内会と学区の自治連合会・各種団体が住民によって運営されている。
- (4) 建物の正面だけをモルタル、タイル、銅板、スレート等の洋風の耐火素材で覆い、装飾した町家のこと。
- (5) 入り口付近や通路の一部が建物や屋根で覆われている路地のこと。トンネル上部が地蔵盆などの町内の祭事用道具の収納スペースとなっていることもある。
- (6) 有隣学区での取り組みは参考文献6、7でも紹介している。
- (7) 「自然」と「社会」、「主体」と「客体」、「人間」と「非人間」を区別する二元論を乗り越えようとする議論に、J.ギブソンによるアフォーダンス、B.ラトゥールによるActor Network Theory (ANT) 等があり、これらは私たちの環境や世界の認識に転換を迫る、ポストヒューマニズムと呼ばれる思想の潮流を成している。ANT等を含む技術を媒介とした社会の構築に関しては、たとえば参考文献8でよく整理されている。
- (8) 展覧会「私の正しさは誰かの悲しみあるいは憎しみ」において、相模原障害者施設殺傷事件をモチーフとして優生保護政策や障害者差別について鋭い問題提起を行ったアーティスト・工藤春香氏のインスタレーションから示唆を得ている。工藤氏は同展覧会において「あなたの見ている風景を私は見ることはできない。私の見ている風景をあなたは見ることはできない。」という言葉を残している。一方で、「お互いの風景をみることはできないという点において、私たちは同じだ」とも述べている（参考文献9）。

#### 参考文献

- 1) 越山健治、室崎益輝（1999）：災害復興計画における都市計画と事業進展状況に関する研究—北但馬地震(1925)における城崎町、豊岡町の事例、都市計画論文集、第34巻、pp.589-594
- 2) 佃悠、前田昌弘（2023）「北但馬地震から98年—城崎温泉の復興その後」建築雑誌、第1772号、pp.42-45
- 3) エドワード・レルフ著、高野岳彦・石山美也子・阿部隆訳（1991）『場所の現象学—没場所性を越えて』筑摩書房
- 4) レイ・オルデンバーグ著、忠平美幸訳（2013）『サードプレイス—コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』みすず書房
- 5) エリック・クリネンバーグ著、藤原朝子訳（2021）『集まる場所が必要だ—孤立を防ぎ、暮らしを守る「開かれた場」の社会学』英治出版
- 6) 前田昌弘（2020）「非常時の都市収容とまちづくり」建築討論、2020年1月号（特集：オーバー・アコモデイティング・シティ Over Accommodating City）
- 7) 前田昌弘（2021）「環境と協同し、住まいを開く」こころの未来、第25号、pp.22-25
- 8) ピーター=ポール・フェルベーク著、鈴木俊洋訳（2015）『技術の道德化—事物の道德性を理解し設計する』法政

大学出版局

- 9) 東京都現代美術館 (2022) 『MOT アニュアル 2022 私の正  
しさは誰かの悲しみあるいは憎しみ 展覧会図録』